



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:83.

大腸がん化学療法教育プログラム「過敏症・インフュージョンリアクションの看護」の効果と課題

本田 英里, 國本 紅美子, 宮地 実穂子, 上西 のどか, 瀧口 史也, 佐藤 光, 田中 理佳

大腸がん化学療法教育プログラム 「過敏症・インフュージョンリアクションの看護」の効果と課題

○本田英里 國本紅美子 宮地実穂子 上西のどか 瀧口史也 佐藤光 田中理佳
旭川医科大学病院 看護部 6階東ナースステーション

【目的】A病棟は大腸がん患者が約60%を占め、短期入院で化学療法を継続的に行っている。看護師の化学療法看護に関する知識・経験に個人差があり、質の高い化学療法看護を行うために、まずは生命に関わる過敏症・インフュージョンリアクションに対応したプログラムが必要であった。本研究では、教育プログラムを作成・運用した効果と課題を明らかにする。

【実践方法】A病棟に所属する看護師全員(38名)を対象に、知識編とシミュレーションからなるプログラムを実施した。知識編は①医師②がん化学療法看護認定看護師③薬剤師からの講義、シミュレーションはメリルのID 第一原理を用いて①机上編②実践編とした。シミュレーション前後で看護師全員に無記名でアンケート調査を実施し、得られた結果は記述統計を用いて分析、自由記載を質的データとして意味内容ごとに分類、後ろ向きに分析した。

【結果】事前調査では『過敏症・インフュージョンリアクションの看護が実践できますか?』という問いに対し、「実際に対応したことがなく実践に不安」「知識不足」等が得られた。事後では「自信に繋がった」「具体的にイメージでき、自己の課題が明らかになった」「実践できるかは不安」等が得られた。『知識を得ることが出来たか』『実践することが出来るか』等の質問6項目において、事前・事後で有意差を認めた。満足度は100%だった。

【考察】これまで病棟で学習会を行っていたが、知識のみの学習会であり、具体的にイメージがつかず実践に結びつけることが難しかったと考える。知識・技術・行動の連続性あるプログラムが、即実践に活かすことができると学習者が感じられたことが、満足度に繋がったと考える。また、学習者各々が見出した課題に対し、看護実践を積み重ねながら省察を繰り返すことで、化学療法看護への理解が深まっていくと考える。今後は、シミュレーションを繰り返し、実践能力を維持することが課題である。